

全体討議

○丸山 本日は熱のこもった報告をいただきまして、どれだけ日々私たちが熱い思いで現場に立っているかということを少しお伝えできたかもしれませんが、予定時間、5時までとしております関係で時間が押しております。大変恐縮ですが、短く質疑応答などをさせていただいて、会を閉じる方向に持っていきたいと思います。

まず、ご質問などおありでしたら、お願いできますでしょうか。何でも大丈夫です。

ありがとうございます。ご所属とお名前から。

○乙井 京都外国語大学の、2年前に新設されましたランゲージセンターという部署の事務職員の乙井と申します。本日は非常に勉強になりました。そして立教大学の実情がちょっと垣間見られたような気がします。いろいろありがとうございます。

質問が幾つかあるんですけども、1つは、留学生と日本人がバディになって、お互い学び合うというところで、留学生のレポートなどを日本人が補助する、教えてあげるといったことがあったんですけども、日本人学生は日本語教育についての専門家じゃないということでしょうか。

○丸山 じゃあ、ちょっとここは浜崎先生から、まず。

○浜崎 私どもの学部は、池田先生、丸山先生という日本語教育がご専門の先生がいらっしゃるんですけど、それを専門に学んでいる学生も一部おります。ただバディになってもらう学生を募集する際に、それを条件にはしていません。つまりバディには両方いるということです。日本語教育を専門にしている3年生4年生で、専門的な知見をある程度持っている学生もおりますし、1年生の学生もいますし、両方混ざっている状態です。

○乙井 その場合、間違ったこと教える可能性というんですかね、それについて何か手立てもされずに、学生同士ということで組むのですか。

○浜崎 今のご質問はあれですね、「基礎演習」のバディの活動のお話ですね。

○乙井 そうです。

○浜崎 その場合ですと、例えばレポートの添削の場合は母語でチェックをしていきますので、間違った説明という意味ではなくて、日本語、自然だったらこう

なるという母語の感覚を生かしてやっているかなと思います。

○乙井 ありがとうございます。すみません、押ししているのに幾つか。あと学内でのカリキュラムや教育内容、教務、学生支援体制の真の国際化が必要ということをお伺いしましたけれども、本学でも、日本語が十分じゃない留学生が大勢入学してきます。今までは、教務とかでも、日本の大学に来たんだから日本語わかっているやろみたいな、それが基本で、学内でのいろいろな掲示とか情報も日本語オンリーだったんですね。ところが状況が変わってきておりまして、なかなかその国際化がうまくいかない。日本人学生と留学生が受ける情報量が圧倒的に違うんですね。立教大学ではそういう学生への発信とかで、必ず日本語と英語でやれるとか、そういうことは今現在されているのでしょうか。

○丸山 池田先生、お願いできますでしょうか。

○池田 国際センターの職員の方が来てくださっているのでも何か間違っていたら修正お願いします。立教大学では、留学生に対して情報発信するときには国際センターからは英語、日本語で発信をしてくださっていると思います。ただ、正規学部留学生について、全てがきちんと対応ができているかということ、まだできているところと、できていないところが混在しているというのが実情で、今できていないところを、できている状態にするために、ギリギリやっているというのが今の現状です。

○乙井 ありがとうございます。すみません、今、最後にお話しいただいた池田先生のお話の中で、効果の見える化をする仕組みというふうにお伺いしたんですけども、なかなか効果の見える化というのは難しい、とても難しいことだと思わうんですけども、どういうふうの実現していくかという、何かお考えがございましたらお聞かせ願いたいんですけど。

○池田 もう本当に私の頭の中だけですけれども、効果を見る化するためには幾つかあって、ループリックを使うというのもそうですし、あるいは学生のポートフォリオを使っていくということもありますでしょうし、できる限りのことはいろいろ試していきたい。とにかく1つだけの根拠では弱いけれども、例えばポートフォリオとループリックと学生アンケートが3枚重なると、それなりにやっぱり他の人たちに対して説明をしていくときの説得力というのが増してきますので、そういう形で進めていきたいと思っています。

○乙井 ありがとうございます。

○丸山 ありがとうございます。それではそちらに。

○柳沢 千葉にあります東京基督教大学の柳沢と申します。大変参考になるご発表、ありがとうございます。やっぱり浜崎先生に、具体的なことで恐縮なんですけれども、協働学習の日本語のレポートでやっていらっしゃるということですが、英語ではなくて、なぜ日本語なのか、それとも日本語トラックの学生なのか、そこをご説明願えれば。

○浜崎 ありがとうございます。私どもの学部では、基本は日本語トラックです。入学者が約 20 名の英語トラックも持っています。先ほどお話しした「基礎演習」は日本語で展開している科目のほうのお話でした。大半の正規留学生は、今の段階ではこの日本語トラックに入ってきます。ただ、先ほども言いましたけど、上海で、英語で高校を卒業してきて入学してきた学生は、英語トラックのほうに今乗ってしまって、英語でアカデミック・スキルを鍛えるような授業をしています。だからそちらの可能性もある。今後、立教大学が新しいタイプの留学生を入れていったときには、英語トラックをもう少し大きくしたいと考えています。

今のところは、ある程度、日本語トラックに乗かっていける学生たちが留学生として入ってきていますので、ただ、母語話者のようにはいかないのが、バディの形をとっているということです。

○柳沢 ありがとうございます。

○丸山 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。はい、どうぞ。

○羽鳥 城西国際大学語学教育センターの羽鳥と申します。今日は立教大学のすごく積極的な取り組みを具体的に聞くことができ、大変勉強になりました。

浜崎先生の留学生の受け入れの中で、入試に関するところがあったと思うんですが 2018 年からは N3 以上ということで、文科省は多分、N2 のレベルで徹底するよといった話があって、今本学でも N2 の学生ということで、試験の証明書を出してもらったりしているんですが、実際に来たらと、ふたをあけると、N4 レベルだったりとか、そういった学生がとても多いんですね。

そういったときに、学部の教員としては、いや、日本語がこんなにできないんじゃないからどうにかしてくれ。やっぱり本学の問題ではあると思うんですが、カリキュラムが急に変更できなかったり、科目の増設が急にできない場合もあるので、1 つのクラスの中でかなりレベルの差が出てしまうのが今の現状なんですけども、立教大学ではそのようなことがないのか、もしあればどういう対応をし

ているのか、お願いします。

○**浜崎** ありがとうございます。これは私どもの学部と日本語教育センターと、いろいろ相談をしながら進めてはいるんですけども、立教大学全体で、入学時に日本語のプレイスメントテストを導入するようになりました。立教大学の中では、英語は言語 A と呼んでいて全ての学生に必修になっています。そして、いわゆる第二外国語、立教では言語 B と呼んでいますが、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語から選択して履修することが必修になっています。これまで正規の留学生は、普通にこの言語 B を取っていたのを、16 年からは、日本語力が達していない学生に関しては、言語 B として日本語の授業を取ることになりました。これは学部の外で起きていることです。それに加えて、異文化コミュニケーション学部では、学生が学部の専門科目をきちんと日本語で最後、卒業論文を書くところまで行けるようにということで、学部の中にもさらにそれに追加をして、コミュニケーションセミナー日本語という科目を用意しています。

つまり、入ってきた段階で、若干日本語が弱い学生たちに対しては、学部の専門科目の中で、日本語スキルをさらに上げていくような、それも自分たちの学部の専門と結びつけながら上げていけるような、そういう仕掛けをつくっています。今のところ、もちろんばらつきというか多様性はあるんですけども、何とかみんな頑張って、3 年生、4 年生になっても、「専門演習」と呼んでいるゼミナールにもついてきている。卒業論文を書くときには日本語相談室のお世話にもなりながら、あと学生同士がお互いに、ピアレビューをしながら、何とか卒業論文を形にして出しているというところまで持っていています。

○**丸山** では、あとお 1 人ぐらいかなと思うんですけども、いかがでしょうか。お願いいたします。

○**余** ありがとうございます。私、香港から参りました余と申します。ありがとうございます。

1 点質問ですが、受け入れ態勢ですね。9 月から可能だということで、非常にうれしく思うのですが、香港の例えば高校生の中にも日本語を勉強している人がいますし、また日本のファンが非常に多いということで、1 つ私として聞きたいのは、例えば先ほどお話の中に、立教で日本語プログラムがあるというお話でしたが、例えばこういったものを、高校 2 年生のとき、つまり入学より前の高校

2年生のときでも、あるいは何というか、eラーニングの形で、越境式日本語授業が何かの形にさせていただくことはできますでしょうか。そこから、ある意味では学生を抱え込むというか、日本語を、例えば本当に日本のファンが多いのですが、現地は多様です。日本語を勉強したことない人もいますし、日本語を勉強したことある人もいます。また、日本には留学に来たいのですけれども、どこに行けばいいかわからないという人もいます。その辺りはどのような形で対応できそうか、時間がかかるかもしれませんが、その辺りをちょっとお聞きしたいです。

○丸山 これはもう大学の国際化の方針そのものになってまいりますので、池田先生。

○池田 日本語教育センターかなと思って聞いていたんですけど、違うんですね。

○丸山 大学の方向に合わせて進めますので。

○池田 今の日本語教育センターの短期プログラムは大学生を対象にしたもので、その短期プログラムがあることで観光学部みたいな学びが展開されたりというふうな、役割を果たしていると思っています。それと同じようなものを高校生に対しても実施してくれないかというようなニーズがあることは把握していますので、そこはやっぱり日本語教育センターともう少し相談をしながら……。

○丸山 ご相談しながら、ですね。

○池田 進めまいると思いますし、eラーニングを通した、いわゆる渡日前の日本語教育については、私は個人的には興味が非常にあるのですが、ここも日本語教育センターとご相談しながら、しかし限りなく前向きに進めてまいりたいと思います。ありがとうございました。

○丸山 ありがとうございます。それではよろしいでしょうか。ちょっと短い質疑応答となってしまい、大変申しわけございませんが、時間になりましたので閉会の辞に参りたいと思います。(拍手)

○小林 それでは、これより閉会のご挨拶に移ります。閉会のご挨拶は国際センター長、社会学部教授の黄盛彬先生より頂戴いたします。黄先生、よろしく願いいたします。